

ワイルドと聖書

—「獄中記」におけるワイルドの福音書注解

阿久根 政 子

OSCAR WILDE and THE BIBLE —The Wilde Biblical Commentary in *De Profundis*

AKUNE Masako

The highlight of *De Profundis* is Wilde's interpretation on Christ and the Bible. In the prison, the closed society, Wilde tasted the bitters that we couldn't imagine, and experienced an unbelievable wide world of the heart and soul. Through his experience of the prison, he could say "Where there is Sorrow there is holy ground."

What made him free from sorrow of the prison-life which turn one's heart to stone was the Bible that he was given as a reading book and the Greek Bible in the prison.

Wilde said about the Greek Bible as follows, "At Christmas I managed to get hold of a Greek Testament...and every morning, I read a little of the Gospels. It is a delightful way of opening the day".

This Greek Bible was the support of his heart in the prison-life. Putting his hard experience in prison-life upon the Passion, he tried to make comments upon the Passion.

And about the salvation Wilde said, "Those whom he saved from their sins are saved for beautiful moments in their life."

This study examines that firstly I mention Wilde's conversion to Catholic, and secondly from Catholic biblical commentary point of view, investigate his biblical commentary which he was based on his experience in the prison-life.

Key words : The Bible, conversion to Catholic, Love and sins, humility, confidence

キーワード : 聖書, 改宗, 愛と罪, 謙遜, 信頼

I は じ め に

「牢獄の生活についてなによりも怖ろしいことは、ひとの心を石と化すること」であるとワイルドはこの作品の中で書いている。体験を通しての彼のこの言葉は監獄生活がいかに非人間的な生活であるかを表している。「ひとの心を石と化する」ような生活から脱却し、獄中であるように聖書を深く読み込むことが出来たのは

なぜか。

大学時代のイタリアへの数回の旅行が彼に精神的に大きな影響を与えたこと、彼が若い頃から持ち続けていたカトリックへの関心と、獄中で手にした聖書の出会いがなかったら、その脱却はあり得なかったであろう。聖書は獄中で最初に与えられた書物であり、その後クリスマスのプレゼントとしてもらったギリシア語の聖書はさらに彼を聖書への親しみを深めた。牢獄生

活での彼の心の支えは何よりもこの聖書であった。彼は獄中で味わった苦しみをキリストの受難の苦しみと重ね合わせて、体験的に聖書を深く理解していた。

すなわち、ワイルドが体験した牢獄の苦しい生活はかれにとってキリストの苦しみであり、受難であった。こうしたかれの体験からキリストの受難、キリストの教えを身をもって理解し、解釈することができたと思われる。

この研究では、はじめに彼のカトリックへの改宗の経緯を述べ、次にワイルドが *De Profundis* で述べている聖書の解釈が、彼のキリスト観に基づいたものであり、聖書の深い意味に触れていることを確認するために、彼の引用している聖書の箇所をカトリックの聖書注解を土台として「ワイルドの聖書注解」を考察する。

Ⅱ カトリックへの改宗

この章ではワイルドがなぜプロテスタントからカトリックに改宗したのか。その要因は何であったのか。彼が持ち続けたカトリックへの改宗の希望と臨終の床でカトリックの洗礼の恵みを受けるまでのプロセスについて述べる。

元来、彼の家の宗教はプロテスタントであった。アイルランドのプロテスタントは一般のカトリックの間に挟まれたプロテスタントであるため、特に強烈なものであった。彼の両親は決して宗教的傾向の強い方ではなかったが、ワイルドが教育されたポートラは保守的で頑固なプロテスタントの学校であった。

しかし、日頃からワイルドは親しい友人に、自分は子どもの時カトリックの洗礼を受けた覚えがあると言っていた。彼の死後、1905年にボストンから出ている“Donahoe's Magazine”に、ローレンス・フォックス神父から、ワイルドの生前の言葉を裏書きする事実が発表された。それによると、ワイルドの母は1862年ごろグレンクリーに子どもを連れて毎夏避暑に行き、そこで毎日曜日彼等はカトリックの教会のミサに出席していた。母の求めに応じ、その二人の息

子は母親の立ち会いのもとにフォックス神父からカトリックの洗礼を受けたとされている。これによると、ワイルドは8・9歳（1862年ごろ）の時にカトリックの洗礼を受けたことは間違いないようである。しかし、彼の父親は息子のオズカーがカトリックに改宗すれば、アイルランド西部の土地の相続権を失うと書かれた遺言状からもわかるように、父親は息子のカトリックへの改宗に反対を示していた。これを知っていた母親はオズカーに洗礼を授けたことを皆に秘密にしていたことがわかる。このように、ワイルドのカトリックへの改宗は母親の意志によるものであった¹⁾。

ところで、オックスフォード時代のワイルドに宗教観、芸術観、人生観に相当重大な影響を与えた出来事として、北部イタリア（1875年）並びにイタリア・ギリシャ（1877年）への旅行があげられる。この旅行は1875年の春頃、フローレンス・ボロニア・ヴェロナ・ミラノ等北部イタリアを一週間位で見て回った短い旅にすぎなかった。古典文学やルネサンス美術等に相当教養をもっていたワイルドにとって、このイタリアへの旅行は一つの大きな驚異に相違なかった。特に注目すべき事は彼がこの旅行で見聞したものは、一つの焦点、すなわちカトリシズムに完全に絞られていたことである。彼が強烈な印象をうけたものは、建造物も絵画も書籍もその大部分はカトリック関係のものばかりであったと言われている。すなわち、この旅行で彼は全くカトリック芸術に魅了されつくし、オックスフォードで触れたヘレニズム的なものとは異なった性質の文化に接し、彼の驚異は大きかったに違いない。

寮で親しくなった友人の一人、デビッド・ハンター・ブレリアは後年ナイト爵を授かるほどの人物で、ワイルドと特に親しい友人であった。ワイルドは彼の感化を受け、カトリックに相当な興味を持っていた矢先、イタリアの旅が彼のその興味をますますかきたてたことは疑いない。イタリア旅行の年に書かれた彼の詩の中には、まさにカトリックの詩人の作としか思われぬものもあり、その作品はカーディナル・ニュー

マンからの賛辞も受けたとも言われている。

しかし、彼のカトリックに対する憧憬は一見強烈なものであったが、重大な弱点があった。それは、ワイルドがカトリックの教えそのものに対する理解を持っていなかったことである。すなわち、カトリックの神学とかその教理とかに特別の知識も理解もなかったと言うことである。彼の心を魅了し、吸引したのはカトリックが持っている壮大な寺院建築の美、典雅な美術、天堂を満たす音楽、華麗荘重な儀式等々のかもし出す芸術的な点にほかならなかった。彼のカトリック愛好の原因は、芸術のみであって、それを裏打ちする教養を持っていなかったのである。それ故、ギリシア文化に直面すると彼の知的欲望と感情的欲望は一挙に吸い寄せられ、結局カトリックに対しては、感情的愛着にすぎなかったと思われる。一方、彼はその後もギリシア的に生きたが、それでも常に、「カトリックが一番安心して死ぬる宗教だ」と言っていた。1877年から1880年頃までに彼の短詩には、カトリシズムに対する愛着が残されているが、その時期を過ぎるとカトリック的分子はかれの作品から全くその姿を消している。

1879年オックスフォード大学を卒業した年に、ワイルドはロンドンに行き、そこで真っ先に訪問したのはカトリックの修道院、Brompton Oratory（ブロンプトン・オラトリー）であったことは注目すべきことである。彼はオックスフォードと牢獄とが彼の人生の転機であったと述べているが、不思議なことに彼は大学を出た時も、牢獄を出た時もこの修道院の門を叩いている。

三度目に彼がカトリックに手をさしのべた時は、1900年彼が死の床に横たわった年で、彼がその輝かしい登場人物の一人であった19世紀の終幕の年であり、彼自身にとっても一生の幕を下ろした年でもあった。ワイルドは出獄後3年目、再度カトリックへの希望を表している。1900年の春、ワイルドが永遠の都ローマを訪れたのは、聖週間の復活祭前の週のことであった。彼は1ヶ月程ここローマに滞在し、世界各地から集まって来る巡礼の群れに加わって、法王の

祝福を受けたことで身も魂も浄化される思いがして、七度も法王の祝福を受けた上に、同伴者（ロバート・ロス）にカトリックに改宗したいとの旨を述べた。

ワイルドはいつもいま一歩というところまで踏み切れないものがあったようであるが、法王（教皇）の祝福を受けたときには、「ステッキから若芽が萌え出でるようにすら感じた」と言っている。彼が青年時代このローマを訪れた時も（1875年）、カトリックに改宗の一手手前で踏みとどまったのであったが、今度もまったく同じ事であって、聖週間が過ぎると彼の改宗への気持ち遠ざかって行った。しかし、ロスはワイルドが日頃から「カトリックこそ魂を委ねて死ぬる宗教だ」と言っていて、カトリックに改宗する瀬戸際までいっていたことをよく承知していた。出獄後ワイルドの同伴者としてローマに行った時、ワイルドが改宗の意志を打ち明けたが、ロスは自分がカトリックであっただけに、軽率な改宗をもたらす危うさと、しかるべき司祭をローマにもたなかったことから、ワイルドの希望をまともに取り上げなかったこともあったので、ワイルドの死が迫ったいま、ワイルドの願いをこのまま見捨てることが出来ず、1900年11月30日の朝、ロスはバショニスト（御受難会）のカスパート・ダン神父をワイルドの死床に伴って来た。その時ワイルドは神父の洗礼の質問に必要な応答を表示するのがやっとであったが、洗礼は授けられ、病者の塗油の秘蹟が行われ、聖体が授けられた。ワイルドはカトリックに魂を委ね安らかに死を迎えた。12月3日宿を出て、サン・ゼルマン・ド・プレの教会（パリ）に運ばれ、簡単な式の後、郊外のバーニュー墓地に埋葬された²⁾。

Ⅲ *De Profundis* における聖書解釈

ワイルドがキリストに関する四つの散文詩（四福音書）を念入りに読み始めたのは、この作品を書き始めた中頃であった。「クリスマスにギリシア語の聖書を手に入れ、毎朝、独房の掃除と食器磨きが終わると、その福音書を手当

たり次第に十章ほど読むことは一日をはじめる楽しい方法」だとかれは書いている。そして聖書を読むとき、「狭い暗い家を出て百合の花園に来る」思いがし、その上にギリシア語が「キリストの実際に使ったそのままの語句」だと考えると、このギリシア語の聖書を読むことは、ワイルドにとって、「二重の喜び」³⁾ となったようである。キリストは「我良き牧者なり」(ヨハネ10:11)、「野の百合はいかにして育つかを思え。労せず、紡がざるなり」(マテオ6:28)と言われ、またキリストの叫んだ最後のことば「こと成れり」(ヨハネ19:30)のことばも、キリストの口からそのままの表現で、ギリシア語はキリストの日常使っていた言葉だと考えると、このギリシア語の聖書を読むことは、彼にとって生きたキリストとじかに触れることが出来る楽しさを感じていたのである。

ワイルドが福音書を読み、とりわけ「ヨハネ福音書」から、「キリストにとって、『想像力』とはただ『愛』の一つの形にすぎず、かつ『愛』とはもっとも完全な意味において、彼にとり『主』であった。」と考えている。そして愛をなおざりにしてはならないと強調している。

ところで、キリストが「私の愛にとどまりなさい」(ヨハネ15:10)という時、聖書学的に見ると、それはキリストのご意志に従い、キリストの模範に従っていくことにおいてなされることを意味している。ヨハネが書簡の中で「神は愛である」「愛は神から出る」(ヨハネ第一の手紙4:7-21)というこの愛の本質は信仰に基づいて示されることによってもたらされ、これは人間にとっての自然な愛ではなく、神によって示され、信仰によって得られるものである。「愛は神から出るもの」とは、愛のモチーフは神の中に愛の源があることを示し、『神は愛である』とは、愛はそれ自身神の本質であることを意味している⁴⁾。このようなカトリック的聖書の注解に従って解釈すると、「キリストにとって、『想像力』とはただ『愛』の一つの形にすぎずかつ『愛』とはもっとも完全な意味において、『主』である」というワイルドの解釈には

深いものがある。

さらに、「姦通の女」(ヨハネ8:1-11)に関して、かれは次のように述べている。

「ロマンティック芸術の基調そのものこそ、キリストにとっては、自然な生活を築くにふさわしい地盤であった。罪を犯したその場で捕らえられた女性に対して、人々が再三キリストにつめよったあげく、キリストは『あなたたちのなかで、罪を犯したことのない者が、まずこの女に石を投げなさい』(ヨハネ8:7)と言われただけで、世に生きる価値をその女に与えることが出来た」と。

この物語の教えを神学的に解釈すれば、罪人に対してあわれみをかけることである。罪人と神とが顔と顔を合わせて立っている場面は回心へと呼び起こす例示である。キリストがこの罪の女を裁くことなく、世に生きる価値を与えたとするワイルドの解釈は、「罪人に対する神のあわれみ」が表されている。このようにキリストは裁かない(ヨハネ8:15)けれども、それにもかかわらずキリストがこの世にお出でになったのは「裁きのためである」(ヨハネ9:39ファリサイ派の人々の罪)ことも忘れてはならないであろう⁵⁾。

次にマルコ福音書から「シリア・フェニキアの婦人の物語」(マルコ7:24-30)を取り上げ、キリストは「美しいことばを語る力を持った魅力的な人物である」ことを述べ、人は「愛」と「尊敬」をもって生きること、また「いかなる人も愛を受けるに値する」存在であるとワイルドは説いている。

この物語はユダヤ人異邦人の救い主であるイエスを示しており、マルコはこの婦人が宗教的にも生まれにおいても異邦人であることを強調している。またこの物語に出てくる「こどもたち」とは、ユダヤ人のことであり、「異邦人」は犬と呼ばれていた。しかしイエスは「犬」という言葉を用いず、もっとおとなしい、かわいげのある「子犬」という言葉を使っていることから分かるように、キリストは異邦人のことを「犬」とは言わずに、やさしく「子犬」と言

われたのは、異邦人もやがて福音を聞いて神の子らとなることができるからである。イエスの言葉は排他主義を暴露し、同じ家の中に子どもたち（ユダヤ人）と犬（異邦人）を入れ、同じ食卓から食べるという非常に暗示的で意味深長である。イエスは全人類の救い主であり、その恩恵は無限であり、尽きることはない。ワイルドがこの物語に関して、「いかなる人も愛を受けるに値する存在」であると説いていることは正しい解釈である。

次に、「いちばん偉い者」（マルコ 9：33-37）の個所で、「キリストは、人は『花のごとく』生きるべきだと説いた最初の人で、キリストは人間の理想的な型として幼子を取り上げた。そしてこの幼子を年長の人々の模範として挙げた」とワイルドは説明している。聖書学的に天の国でいちばん偉い者とは、「自分を低くして、子どものようになる人」のことであり、「子どものようになる」とは、神の国で偉大になるための条件ではなく、神の国に入るための入国許可の条件である。すなわち、「自分を低くすること」である。「自分を捨てる」ことは神の国における偉大である人々にふさわしい心構えであり、態度である。「子ども」とは、文字通りの意味ではなく、単純さを持った気取らない人を示している。イエスはこれらの「小さい人々」と共にご自身を同一視しておられた。

ところで、ワイルドは「自分を低くすること」「自分を捨てること」すなわち、謙遜、謙讓の精神を獄中で学び身につけた。苦悩に満ちた牢獄生活は、その苦悩というものを中心として、時間が何の変化もなく回転するだけで、ただ悲しみのシーズンだけが無限に続くその最中に、ワイルドは母を亡くし、その悲痛はどん底にまで達した。悲哀のもつ意味を、身をもって体得し、「悲哀のあるところに、聖地がある」という境地に達した。もてるものをすべて失い、後に残るものは絶対の謙讓のみであった。彼が獄中で発見したこの謙讓こそが、彼の新たな人生の鍵ともいうべきものであった。彼にとって牢獄は新しい人生のターニング・ポイントになった。牢獄が与えてくれたものに重大な意味を発

見した彼にとって、「いちばん偉い者」としてキリストが教える「幼児」の真の意味は「謙讓」の中に生きることであった。体験を通して「謙讓な心には、不可能なものはなく、愛の前にはあらゆる道がひらける」と確信したのである。

ワイルドは「マルコ福音書」において、キリストを「美しいことばを語る魅力的な人物」とすると表現したのに対して、「マテオ福音書」では「思い悩むな」（マテオ 6：25, 34）の個所を挙げて、「明日のことを思い煩うなかれ。生命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか」と言うキリストは魅力的だ。なぜなら私たちのために「人生というものを完璧に約言」したのはキリストのみだからだ。すなわちキリストは「人生というものを完璧に要約」した魅力的な人だと述べる。

ここでイエスは、人間は基本的には食べ物、衣服の必要性を述べているが、人間には人を支える外面的な物よりももっと重要で注意を払うべきものがあることを強調している。すなわち人は日常生活の需要を満たすためにあくせくと心配をしてはならない。キリストはここで計画性のある合理的な文化生活を戒めているのではなく、神の摂理に対する信頼を強調しているのである。こう考えるとキリストの教える思い悩むことなく、神に信頼して生きることは、ワイルド的表現で言えば「人生の完璧な要約」と言えるであろう。

同じく「マテオ福音書」二十章第一節から十六節にある「ブドウ園での労働者」のたとえ話では、キリストにとって法律などは存在しなく、ただ例外だけが存在したのだとワイルドは説く。

このたとえ話は、神の定めは人の定めとは異なるが、常にすべての人に正義を示しておられるという論旨を徹底させたものである。最後に雇われた者と最初に雇われた者とは働いた時間は異なるが両組とも一日分として「ふさわしい賃金」をもらっていたのである。仕事にありつけず立っている彼等を、遅くなっていたにもかかわらず、雇ったというところに主人の善意が見られる。神は時間的区別なしに、すべての

人がキリストによって救われることを望んでおられる。いつであろうとキリストの言葉を聞いて答える者はだれでも同じように救われることを示しているのである⁶⁾。

「白く塗った墓」(マテオ23:27)について、ワイルドは「キリストは勿体ぶった『白く塗った墓』を嘲笑い、この一句を永遠に不動のものにした」と述べている。キリストは世間的な成功を軽蔑し、富を人間の邪魔物とみなした。冷え切った博愛、見せびらかしの公共慈善事業、中流階級の連中の形式主義、これらのものをキリストは侮蔑をもってあばかれた。「律法学者やファリサイ派の者よ、あなたがた偽善者は不幸だ。あなたがたは白く塗った墓に似ている。…外側は人に正しいように見えながら、内側は偽善と不法で満ちている」(マテオ23:27-28)とキリストは嘆かれる。

白く塗った墓とは、旧約時代(民19:16)、墓に触れた者が律法上汚れた者となる。このことを防ぐ意味で国をあけて祝う過越の祭りのときには、その四週間前に墓を白く塗る習わしがあった。キリストはこのような旧約時代の習慣を例に挙げ、外側は美しく見えても、その内側の不浄をご覧になる神の目を意識させ、心の中にある偽善や不満に満ちた行いを咎められた。ワイルドは「白く塗った墓」という聖句の説明として、当時のイギリスの社会で見られた表面的な博愛慈善事業、形式主義を例に挙げていることは実に適切な説明である。

最後に「ルカ福音書」からは「イエスと罪の女」(ルカ7:37, 38, 47)・「放蕩息子のたとえ話」(ルカ15:11-31)・「エマオへの旅人」(ルカ24:13-34)の注解を行っている。

彼は「イエスと罪の女」「放蕩息子のたとえ話」の話から救いの条件とはどんなことを示している。キリストが罪から救ったひとびとは、その生涯のうちに美しい瞬間があったという。その瞬間ゆえに救われたのだと説く。

「罪深い女」がキリストと出会った時、この女は「香油の入った石膏のつぼを持って来て、イエスの足下に近寄り、泣きながらその足を涙で

ぬらし、自分の髪の毛で拭い、イエスの足に接吻して香油をぬった」(ルカ7:37-38)この一瞬のゆえにこそこの罪深い女は天国に座ることが出来たと説明する。この「美しい瞬間」とは罪人が回心するその瞬間のことである。悔い改める瞬間が悟りを得た瞬間であり、これは人が自分の過去を改革する手段を意味することをワイルドは自分の体験を通して述べている。

さらに、「放蕩息子」のたとえ話(ルカ15:11-31)では、放蕩息子が父の前にひざまずいて泣いたその瞬間こそ、娼婦のために使い果たし、豚飼いとなって豚の食べる豆殻まで欲しがるほど飢えた彼の過去を、その生涯のうちもっとも美しい聖い瞬間に変えたのだと述べ、罪から回心する瞬間を美しい瞬間、すなわち神と出会う美しい聖い瞬間だと言う。ではなぜ回心の瞬間がそれほどまでに美しいのか。

「イエスと罪の女」(ルカ7:47)では、「彼女のおおくの罪がゆるされるのは、彼女が多くのお愛を示した」からであるという。すなわちゆるしが愛の原因であること。罪の女がイエスに愛を示す以前に、教えを聞き、罪を痛悔して罪のゆるしを受けていた。これが愛と感謝の行為となって現れたのである⁷⁾。回心の瞬間は罪人の心を神に向かわせる瞬間であるから美しいのであろう。

イエスはファリサイ派の人々からしばしば食事招待されていた。イエスの使命はすべての民のためであるから、だれの招きにも拒まれなかった。罪の女が突然、家に現れたのは、彼女がイエスを前から知っており、その説教も聞き、自分の罪の生活を捨てていたものと思われる。当時の習慣として客を招いた家には、だれでも客に会うために自由に入ることが出来た。それで、この女も招かれていなくても、容易にイエスに近づくことができたのである。当時の習慣として、食事の場合にははきものを脱ぎ、体を横たえ、足を伸ばしていた。それで、この罪の女はイエスの後ろに回って足を洗い、接吻し香油を塗った。これによって、イエスにたいする深い愛と尊敬を表したのである。

「彼女は多く愛したから」は、完全な愛徳は

罪をゆるす力があると言うことを示している。「ゆるされることの少ない者は、愛することも少ない」「あわれみが大きければ大きいほど愛も大きくなる」。すなわち、彼女がゆるされたから愛したのである。キリストのゆるしが先にあり、その結果愛することを知ったのである⁸⁾。

「放蕩息子」のたとえ話（ルカ15：11-31）は、ルカ福音書だけに見られ、思想的に深く、文学的に美しく感銘深いもので、「福音書の真珠」とも言われている。この物語の中で父の愛と息子の罪が描かれており、神が父であり、罪人が息子として表現されている。このたとえ話の根本概念は、罪人に対する神の愛である。「『死んだのに生き返った』という語の繰り返し、イエスの受難と復活について私たちに考えさせているものである⁹⁾」が、はたしてワイルドがこの「放蕩息子」のたとえ話において、キリストの受難と復活についてまで考察していたかどうかは疑問である。なぜなら、ワイルドのキリスト像の中で彼は苦しむ人間キリスト、受難するキリストについて描いているが、復活するキリストにはほとんど触れていないからである。しかし、ワイルドが復活したキリストに触れている聖書の箇所が一個所ある。それは次に挙げる「エマオへの途」（ルカ24：13-34）の引用である。

ところで、ワイルドはキリスト以降の唯一のキリスト者として、アッシジの聖フランシスコをあげ、「神は彼に詩人の魂を恵み、彼に神秘的な婚姻により、貧困を花嫁として娶った。この詩人の魂と乞食の肉体とによって、彼は完全への道の困難さを感じた。このようにして、聖フランシスコはキリストを理解し、キリスト似たものとなった。聖フランシスコの生涯こそ、まことの『イミタチオ・クリスティ』（キリストに倣う）である」とワイルドは述べている。要するに聖フランシスコが貧困を通して、キリストに倣い、神のみ前に出たように、すべての人も神によってキリストの前に出るように運命づけられている。そして、誰もが少なくとも生涯に一度はキリストと共に「エマオ」へと歩むのだと述べ、キリストの復活の信仰を間接的に

表明している。

この「エマオへの途」の挿話は、福音書のなかでも美しい物語のひとつである。特にルカは生き生きと長く記している。復活の目撃者の一人であるクレオバからこの出来事を直接聞いたからであろうと推察される。二人の旅人は、イエスの死の悲しみに打ちひしがれていたため、「目がさえぎられて」復活したイエスに気付かなかった。しかし、復活したイエスが歩きながら話されたキリストの教え、共に食事をした時のキリストの行為によって、「二人の目は開かれ」、復活したイエスを認めることができた。こうしてこの二人も、マリアや婦人達そしてペトロと同様に復活の証人となった。ワイルドが述べている、「誰もが生涯に一度はキリストと共にエマオへと歩む」のだという言葉に、復活したキリストと共に神の国への道を歩む希望が示されている。牢獄生活の苦しみ、精神的肉体的受難が彼を清め、獄中の苦しみが単なる苦しみで終わせることなく、キリストが受難を通して復活されたように、ワイルドもこの苦しみを通して、キリストと共に復活する希望と喜びを期待していたであろう。

Ⅳ ま と め

「獄中記」（De Profundis）の圧巻は、キリストに対する彼の解釈であり、聖書解釈にあるといって良いであろう。

ワイルドはこの閉ざされた社会（レディング監獄）で、およそ自由な人間が想像できない苦しみをなめ、信じられない程の広い魂の世界を体験した。しかし人間はそうした総て欠落した状況に於いて、人間は自分を完成出来るということをワイルドは私たちに示した。彼はこのことを知識的な面からではなく、極めて人情的な到達の仕方ですて手に入れた。ワイルドが破産裁判所の廊下で見かけた、親しくしていた青年ロバート・ロスとの出会いの場面の描写は人の心をうつものがある。

「悲哀のあるところに聖地がある。…ロビー

や彼のような天性の人間はそれを悟ることができる。ぼくが二人の警官にはさまれて、監獄から破産裁判所に連れ出された時、ロビーは長い陰気な廊下で待っていてくれた。ぼくが手錠をはめられ、うなだれて傍を通り過ぎたとき、重々しく帽子をあげて、合図してくれるためであった。…この美しい純な動作はあたりの人々をしっかりと鎮まりかえらせた。…聖者たちが跪いて貧しいものの足を洗い、身をかがめてらい病やみのほおに接吻するのも、この精神によるものであり、この愛の現れなのだ。ぼくはあの行いについて、ただのひとこともロビーに語ったことがない。…ぼくはそれをこころの宝庫のなかに蔵っておいた。…あのささやかな、うるわしい、ひそやかな愛の行為の思い出が、ぼくのためにあらゆる憐れみの泉の堰を切り、荒野をバラのごとく花咲かせ、ひとりぼっちの流涕の苦しみからぼくをすくいあげてくれた。…ロビーの行為が、いかに美しいものだったかということだけでなく、なぜぼくにとってそれほど意味深かったのか…ひとはいつか悟るであろう」¹⁰⁾

ワイルドは獄中であって、キリスト教的な人生の味わい方をしようとしている。「これまでわたしの身に起こったあらゆることをわたしにとって正しいものとしなければならぬ。板の寝床、胸の悪くなるような食物、指先が痛みでしびれて無感覚になるまで荒縄をきれぎれに裂いて槓皮(まいはだ)をつくる作業、賤役、酷薄な命令、衣服…こうしたものはそれぞれみな肉体の墮落などただのひとつもない」のだと。(p.69)

キリスト教の基本精神はこの世を正視することにある。キリスト者は建て前で生きていない。本音で生きる。多くの場合、幸福でも不幸でもない混沌の中であって、人生の意義を見出したとき、改めてこの不備な生涯が一種の明るさを持つことに気づくのである。ワイルドは自分の気づきを次のように記している。

「この7・8ヶ月と言うもの、外部からの厄介事にもかかわらず、…ぼくは人と神とを通し

てこの牢獄のなかにいきわたっている新しい精神にじかに触れることができ、言葉では言い表せぬほど救われている。投獄された最初の一年間は、無力な絶望のうちに、「なんと怖ろしい結末」なのだと叫ぶほかなかったのに、いまは、「なんとという素晴らしい始まり」だろうと自分に言い聞かせようとしている。」

「去年の五月に釈放されていたら、嫌悪の情を抱いたままここを去り、役人達をひどく憎み、その嫌悪はぼくの命を毒してしまったであろう。」しかし、もう一年余計にここに閉じこめられたことによって、ワイルドは人間性というものがこの囚人達とともに牢獄にもあったことを発見し、一年前の役人に対する嫌悪の情ではなく、今度ここを出ていくときにはここににいる人々から受けたたくさんの親切にお礼を述べたい。そして、「より深い人間になったということは、苦悩を経てきた人間の特権である」といつている。

最後に、「自由の身になったら」、友達が悲しみを心に抱き、それをぼくに分けてくれようとしなければならぬ、ぼくの心はこのうえなく痛く感じるであろう。…ぼくには悲しみを分けてもらう権利がある。この世の美しさを眺め、この世の悲しみを分かち、この二つのもののすばらしさをいくらかでも理解できるひとは、神的なものにじかに触れた人であり、神の秘奥に近づいた人なのだ」と説くところに、ワイルドの偉大さがある。キリスト教的な精神によって監獄の生活を乗り越え、自分の苦しみをキリスト受難と重ね合わせ、獄中での体験を通して聖書を味わい解釈を施したところに、ワイルドの聖書注解の特徴が見られる。

[注]

- 1) 平井博：オスカー・ワイルドの生涯、松柏社、1960、p.31-35
- 2) 同上、p.250-251
- 3) 福田恆存訳：獄中記 *De Profundis*、新潮社、1982、p.130
- 4) Raymond E. Brown, S. S., Joseph A.

Fitzmyer, S.J. etc. edit: The Jerome Biblical Commentary, Geoffrey Chapman, 1970, p.410

5) 同上, p.441

6) フランシスコ会聖書研究所: 聖書マテオによる福音書, 中央出版社, 1966. p.91. 177

7) フランシスコ会聖書研究所: 聖書ルカによる福音書, 中央出版社, 1966. p.101

8) 4) と同じ, p.138

9) 4) と同じ, p.149

10) 3) と同じ p.84-85

[参 考 文 献]

1) Oscar Wilde: The Complete Works of Oscar Wilde - Stories, Plays, Poems, Essays, Collins, 1986

2) Jarlath Killeen: The Faiths of Oscar Wilde - Catholicism, Folklore and Ireland, Palgrave Macmillan

3) Rupert Hart-Davis ed.: Selected Letters of Oscar Wilde, Oxford University Press, 1979

4) The Jerusalem Bible, Darton Longman and Todd, 1966

5) 聖書: 新共同訳, 日本聖書協会, 1997
(2011年3月24日受稿)